

編 集 後 記

本号は多賀須博士の精力的な Ménétrier の原著の紹介にはじまり、全巻巨大皺襞に関するものが集録され、期せずして現時点における本症の具体的な指標が示された。

特定な疾患では原著の正確な理解が不可欠であることは言うまでもないが、本症は原著が仏語であったためか症例の取り扱い方にかかなりの混乱と幅があったことはいなめない。詳細な原著の解説および症例をお読みにになった読者は今後巨大皺襞例に遭遇した場合、そのまま診療に役立つものと自負している次第である。

しかし座談会の記事にもみられる如く、非似所見の整理、血清蛋白、胃液酸度等を含めた臨床像との関連、引いては本症の発生、病因論的事項などその解明は今後に待たなければならない多くの問題点が提起されている。それについても、今度の全国集計に際して諸先生方から御提出いただいた症例はいずれも貴重なものばかりであったが、紙数の制限のために 10 症例と一部写真のみの掲載に止まったのは残念であるが御了承をお願いしたい。

また、巻末には山田、大森両博士により本症の X 線、内視鏡診断のこつが具体的に示された。いずれも巨大皺襞のみの問題に止まらず過緊張胃の患者の上手な検査法に通ずるものであり、深い思慮と豊富な経験がにじみ出ていて感銘深い。それにしても、著者の一人大森博士を不慮の事故で失ったのは同好の私たちには惜しみて余りあることであった。おそらく最終論文であろう本稿の主旨を十分に診療に活かし、読者と共に氏の冥福を祈りたい

<田 中 弘 道>

<編集> 早期胃癌研究会